



2024 年

7 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 7 月 2 1 日 ルカ福音書 12 : 22 - 32 .

『 一輪の花、神の国 』

・ 7 月 2 8 日 マタイ福音書 13 : 44 - 52 .

『 損失と利益 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

「神の国を求めなさい」、イエスは弟子たちに向かってそう語ります。これはルカ福音書の記述です。マタイ福音書ではここは、「神の国と神の義とを求めなさい」となります。ルカは、神の国においては、元より“神の義”も成立していることに関して、敢えて念を押す必要はないと思ったのかもしれませんが、いずれにしても、あなたたちは「思い煩う」のではなく、「求めなさい」と。

さてイエスは彼らに向かって何を“思い煩うな”と言ったのかというと、何を食べようか、何を着ようか、と思い煩うなと言いました。マタイ福音書では、中間に「何を飲もうか」という悩みが一つ増し加わります。ルカよりもマタイの方が、悩み多き人物だったのかもしれませんが。

森羅万象を養い育てる神は、鳥（マタイでは空の鳥）や野の花の生育にも深く関わっておられます、彼らの生存に支障が出ないように。人間も同様の境遇に置かれているのだと。けれどもなぜか、人間だけがいつも“思い煩っている”のはおかしいと。ここでは弟子たちが“人類”を代表しているようです。さてこの人類共通の悩み（？）に対する答えが示されました。

神の国（と神の義と）を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられる（衣食の不足は補われる）。

イエスはここではなぜか“衣食住”の“住”に関しては触れません。鳥や野の花と、人間が同格に扱われているのでしょうか。

創世記第一章の記述を読むと、アダムとイブはたしかにエデンの園で生活するために良い物件を探し求めた形跡はありませんし、“家”は無用の長物でした。けれども私たちの“先祖”は、そこを追放されてしまいます（失樂園）。それ以来、人間には家づくりや物件探しがつきまといます。あきらかにそこは樂園や“神の国”とはまた異なる世界でした。

なぜかそこに、鳥や野の花までが一緒に紛れ込んでしまったようです。彼らはエデンの園の動植物とは異なる存在だったのでしょうか。聖書の読者は、必ず一度そのことを“思い煩う”ものです。神の国とエデンの園の

“異同識別”の能否や、神の支配領域における断絶は存在するのかわからないのか、いや、そもそも創世期（創世記）のエデンの園はいったいどこに消えてしまったのか。エデンの園に、もはや人間は存在しません。ただ、一定の動植物は存在し、人間を誘惑した蛇も、そこには残存したままです。こうした読者の“思い煩い”を解消する術を知りません。

ただ、思い煩うことをやめない人間は、正しく神と向き合うことが、大の苦手です。元よりエデンの園に対する望郷の念はなく、そこで“裸で”生きられることに何の価値も見出せず、ただただ、神のみ旨に反することばかりに腐心し続けました。そうこうするうちに、世界は大混乱に陥ってしまいました。おそらく人類は自らを悔い改めることから始めなければならないようです。神の国と神の義とを求める前に。

《 損失と利益 》

全財産を売り払ってでも手に入れたいのが“天の国”であるというのがイエスの譬えです。それくらい掛け替えのないものであると。マタイ福音書にのみ記されているのがこの譬えです。さて、“天の国”のことはマタイ福音書以外では“神の国”となり、どちらも神の支配領域を意味し、そこには天と地の境界は、とくに設けられていません。

さて、そもそも領域を言い表すのが「～の国」という言い回しであるのに、その国の譬えが、“宝”や“商人”、“引き網”といったもので語られるのが“天の国（神の国）”なのだとすると、謎解きは一筋縄ではいきません。聖書を読む限り、そこが静的な場であるというよりも、何か動的な活動空間（？）を意味しているかのようです。

ある畑に“宝”が隠されていることが分かり、ある人がその畑を買い取る、というのはその範囲が“国”の譬えのようであっても、譬えそのものは“宝”に似ているという“国”です。中東の紛争地域では今も昔も、襲撃を受けやすい建物ではなく、庭や畑の地中深くに高価なものを秘蔵しておく習慣があったようです。ただし、掘り起こされる前に持ち主が他界し

てしまうと、時がたって見つかる埋蔵金の如く、現物が後代の発見者の所有物となるケースをもって、その“国”が譬えられます。

次は真珠を探している“商人”、モノではなくヒトの譬えです。天の国（神の国）はそのヒトに似ていると。その人は高価な真珠を発見すると所有財産を全て売り払ってその真珠を手に入れる“商人”です。けっしてコレクターではありません。必ず高値で売ることが前提となります。古代の王族は光り輝く大きな真珠を商人から購入することが、よくありました。

最後の譬えは“引き網”です。その網の捕獲物には種々雑多なものがあり、これを“人々が(?)”選り分ける時に、良い物は壺に収め、駄目なものは投げ捨てられます。後半を読むと、その正体不明の“人々”が、どうもキリストが派遣した“天使”であることが読み取れますが、けっして分かり易い譬えとは言えません。少なくともその“国”は楽園のイメージとは程遠いどこかの活動空間のようで、弟子たちは煙に巻かれてしまいます。ところが、51節を読むと、弟子たちはイエスの「分かったか」の問いかけに対し「はい」と答えており、今度は読者が煙に巻かれてしまいます。

今日、引用した言葉はイザヤ書の33章6節にある言葉です。

主はあなたの時代の確かな支え、救いの富、知恵と知識。主を畏れることこそ、主からの宝である。

「主からの“宝”」によって、もたらされるのが「主を畏れること」。その主とは「確かな支え」であり、「救いの富」であり、「知恵と知識」であると。イエスの譬えと、何か接点が見出されるのだとすると、主なる神からの“宝”こそ、“畏れ”であり、信仰（の始まり？）が考えられます。聖書を読むと、古代、数多くの人々がイスラエルの主なる神に対する信仰心を抱いていたことが確認されます。ただ、全てをなげうって神に従う程の信仰はというと、残念ながら殆ど見出せない、それ自体がいにしえの預言者の嘆きとして綴られました。こうした長い時を経た後に、神が人となったのがイエス・キリストです。人間はこの神キリストに、父祖たちの信仰心に優る信仰、全てを捨てて従う決心が固まるのでしょうか…。